

言葉集所収式子内親王周辺歌  
—高倉三位と前斎院帥の歌—

奥野 陽子

情報科学部 情報システム学科  
(2011年9月30日受理)

Poems Pertaining to Shokushi-Naishinnō in *The Gen'yōshū*  
—Poems by Takakura-Sanmi and Saki-no-Saiin-no-Sochi—

by

Yoko OKUNO

Department of Information Systems, Faculty of Information Science  
(Manuscript received Sep 30, 2011)

**Abstract**

The only extant poem by Takakura-Sanmi, the mother of Shokushi-Naishinnō, is found in *the Gen'yōshū*. *The Gen'yōshū* also contains three poems by Saki-no-Saiin-no-Sochi, a Saiin nyōbō. One of her three poems appeared in correspondence with Shokushi's mother. This paper interprets these poems and explores the profile of Takakura-Sanmi and the environment of poetry and music enjoyed in those days.

キーワード ; 言葉集, 式子内親王, 高倉三位, 賀茂斎院

Key word ; *The Gen'yōshū*, Shokushi-Naishinnō, Takakura-Sanmi, Kamo-no-Saiin

# 言葉集所収式子内親王周辺歌

## ―高倉三位と前齋院帥の歌―

情報科学部 情報システム学科 奥野 陽子

(二〇一一年五月三〇日受理)

### 一

長らく散逸したものと考えられていた惟宗広言の私撰集『言葉集和歌集』は、一連の承空本の一冊として、冷泉家時雨亭文庫にその下巻が蔵されており、冷泉家時雨亭叢書に影印されている(解題 赤瀬信吾・岩坪健 第七卷『平安中世私撰集』一九九三年八月)。この和歌集は、二三〇首ほどの新出歌をおさめているという点で資料的価値が高いと評価されている(前掲書及び新編国歌大観『言葉集和歌集』解題)。そこには、式子内親王の母である高倉三位が、前齋院帥と交わした歌が一首含まれている。高倉三位の歌として伝わっているものとしてはこれ以外に知らない。たった一首ではあるが、式子の母の面影を伝える貴重な資料であるといえよう。また、前齋院帥の歌は言葉集に高倉三位との贈答を含めて三首伝わっており、これもまた、式子内親王の齋院時代の様子を知らずがなるであろう。これらの歌をとりあげて考察する。

式子の父後白河院については資料が豊富であるが、母については情報は多くはない。母は藤原氏北家閑院公季流権大納言春宮大夫公実の五男、季成の女、成子である。後白河院の母待賢門院と季成は異母姉弟だったから、式子の両親はいとこ同士であったことになる。

即位など思いもかけず、今様に熱中していた不遇時代の雅仁親王の寵愛を受け、亮子、好子、式子、守覚、以仁の三女二男を久安三年二翌から仁平元年二五にかけて毎年次々と生んだ、というのが、高倉三位に関して知られていることである。雅仁親王には藤原懿子という妃がいたが、康治二年二翌に、後の二条天皇を産んで亡くなった。成子はその後に雅

仁親王の寵愛をうけたと思われる。雅仁親王に仕えていたときの女房名は播磨局であつたらしい。この呼称は父季成、弟公光の当時の任国とは関係が見られず、由来は不明である。

子女については、本朝皇胤紹運録などに基づいて、もう一人、保元二年二丑生まれの休子内親王がいたと従来からされてきたが、田中本帝系図、愚昧記、今鏡の記述を根拠に、休子の母は平信重女であろうという、肯いいうる見解が出された。以仁と休子の年齢差は五歳であり、その間に思いがけなく雅仁親王は天皇になったわけで、もし休子が成子腹であったのであれば、後白河天皇即位後の成子との関係の継続を推し量る資料となるのであるが、休子は成子の女ではなさそうである。以仁との五歳という年齢差から見ても、即位後の後白河天皇は、龍潜時代の古女房とは関係を改めたと見るほうが自然であると思われる。後白河が即位したときに、播磨局は格上げされて、従三位に叙せられ、高倉三位と呼ばれるようになったのであろう。しかし女御にはされていない。

即位後、藤原欣子、藤原琮子が続いて入内し、忻子は中宮となり、琮子は女御になっている。二人とも同じ三條家で、季成の兄の孫である。後白河が院となつて二年目の、平治元年二五には、成子の父季成は、民部卿から中宮大夫、皇后宮大夫を兼ねる昇進をし、弟公光は、従三位となり播磨守にもなつてはいる。しかし、当の成子が、多数の子女を生んだにもかかわらず、即位後の後宮に力を持つ立場になり得なかったのは、後見力の違いもあつたのであろう。平氏という強い後見を持ち、才気にも恵まれた寵妃平滋子(後の建春門院)に院が出会ふのは即位後数年経つてからである。

成子の生年については、日本古代後宮表(『平安時代史事典』資料編

二〇〇六年一〇月 角田文衛監修／(財) 古代学協会・古代学研究所編)も没年のみ記して享年の欄が空白になっており不審であるが、愚昧記によって確定することができる。治承元年二七三月一日没、五二歳とあるから、没年から換算して大治元年二二生生まれである。大治二年二二生生まれの後白河院より一歳年上であったことになる。雅仁親王が即位したとき、成子は三〇歳になっていた。忻子の入内の年齢は二二歳、琮子は一三歳であった。突然舞い込んだ帝王の座に心機一転ということもあつたのだろうか。ただし、この二人とはあまり親しまれなかつたらしく、子女はいない。忻子にいたっては中宮、皇后、皇太后になってはいるが、早くから院とは同居していないという。

式子が二条天皇即位に伴い、内親王宣下され、第三十一代賀茂齋院に卜定されたのは平治元年二五一〇月十一歳のときである。初齋院の時期を終えて紫野本院に入り、賀茂祭に初めて奉仕したのは応保元年二六四月のことであった。そのころ、母成子は、高倉三位と呼ばれ、三條家ゆかりの三條高倉第に暮らしていたであろう。

言葉集所収の高倉三位歌は、式子が紫野本院に暮らしはじめてそれほど年月はたっていない時期のものだと考えられる。

## 二

言葉集雑上にあるのは次のような贈答歌である。<sup>註⑥</sup>

本院の藤さかりなりけるを、「こころあらん人にみせばや」と女房申しあひたりければ、高倉三位の御許へよみてたてまつりける

みせばやないろもかはらぬこのもとのきみまつがえにかかるふぢなみ

返し 高倉三位

しめのうちにのどけきはるのふぢなみはちとせをまつにかかるとをしれ

前齋院帥というのは、齋院に仕える女房の一人であろう。式子が齋院となつて紫野にある本院にいるころ、その藤の花が美しく盛りに咲いていた。女房たちは口々に、「能因法師の歌ではないけれど、この藤の

見事さを、情趣のわかる人にお見せしたいものです」と言い合っている。「こころあらん人にみせばや」というのは、次の著名な能因法師の歌を引いているのである。<sup>註⑦</sup>

正月ばかりにつのくにははべりけるころ人のもとにいひつかはしける

能因法師

こころあらむ人にみせばやつのくにはわたりのはるのけしきを

(後拾遺集 春上 四三)

そこで、帥が、おそらく式子の意を汲んでであろう、高倉三位の許へこの歌を詠んでさしあげた、というのである。帥の歌を解釈してみよう。初句切れで、「みせばやな」は、お見せしたいものだ、の意である。二句以下がその目的語で「藤波」を見せたいのである。また、帥歌の「このもと」には、「木の下」と「子の許」が掛けられている。この掛詞の例を挙げておく。

夏はそのもみぢのちりのこりたりけるにつけて、女五のみこのもとに

天曆御製

時ならでははその紅葉ちりにけりいかにこのもとさびしかるらん

(拾遺集 哀傷 一二八四)

「柞の紅葉」は母の象徴である。母の亡くなった内親王を父村上天皇がなぐさめている歌で、柞の「木のもと」と「子の許」が掛けられている。

入道殿にたきものましたまへりけるに、たてまつれたまはざりければ

いづかたのかぜさそふらん梅のはななどこのもとに匂ひだにせぬ

(定頼集 二八七)

入道殿は藤原公任である。定頼が、父公任に薫物をお願いしたのに、父入道殿(公任)があげなかつたので、定頼が、どちら向きの風が梅の花の香を誘うのでしょうか、梅の花はなぜ子の私のもとに匂ってこないのでしょうか、と不満を訴えている。梅の花の縁語の「木の下」と「子の許」が掛けられている。

帥歌第二句「色もかはらぬ」は連体形で、すぐ下の掛詞の「木」「子」の両方に掛かると考えるのが自然であろう。「木」に関しては、常緑の松・榲が思い合わせられる。「松」に関しては次の歌が参考になる。

冬の賀茂のまつりのうた

藤原敏行朝臣

ちはやぶるかものやしろのひめこまつよろづ世ふともいろはかはら  
じ  
(古今集 東歌 一一〇〇)

「賀茂の社の姫子松」が、子である式子を連想させるとすれば、「色はかはらじ」とあるその意味が「色もかはらぬ」に響き、そこに、式子が齋院として無事になり過ぎているという意味を込めていると見られる。「色もかはらぬ」が、植物の常緑を比喻として人間の無事や不変を祈る意味に用いられるのは常套である。端的な例を一例挙げておく。

としごと神をぞいのるさかきばのいろもかはらでをらんとおもへば  
(伊勢集 八一)

「神楽」題であろう。年ごとに神に祈りを捧げることだ、この常磐の榊葉のように、われわれも末長く変わることなくいたいと思うから、の意である。「折らん」と「居らん」の掛詞がある。

帥歌「色もかはらぬ木」は下句では「君まつがえ」の「松」と表現されているが、これが松だけを指すのであれば、やや重複の感は否めない。高倉三位の返歌に「しめのうちに」という詞があるところからは、「色もかはらぬ木の下」の「木」には、神垣の注連のうちの典型的な植物である榊をも含むと考えられる。

四月、神まつりいそぎたるところ

いのりくる神のしるしはさかきばのいろもかはらぬところなりけり  
(元輔集 一一八)

賀茂にまでける人人いりきて、十月ばかり、御前なるもみぢをみていみじうめでて、いろしばしといはせれば、さかきにかきて

しめのさかきはいろもかはらじ  
(大齋院御集 四五)

さかき さがみ

としふれどいろもかはらぬさかきばをのどかにさしていのるきみがよ  
(六条齋院歌合 永承三年 三)

神楽 さぬき

としふればしげるさかきのもとすゑにむれあそぶしめのうち人  
(六条齋院歌合 永承四年 三)

(齋院に人人あまたまありてよむに) おなじころ

さかきばのときはならひにさくらばなしめのうちにはちらでとしへ

よ  
(頭綱集 四三)

帥歌の「色もかはらぬ」には、「このもと」の二つの意味に応じて、植物の常緑と、子の恙なきの二重の意味があるといえよう。

「君まつがえ」の「まつ」には、君を「待つ」と、「松」を掛けている。「君」はいうまでもなく高倉三位である。

帥歌は、詞を補って解釈すれば、次のような意味になるであろう。

お見せたいものですよ。ここ神祀る齋院は、色も変わらない木のもとにありますが、そのように内親王様は恙なくいらつしやいます。その枝には見事な藤波がかかっていることですよ(せひ、ごらんになつてください、お待ちしています)。

掛詞を駆使した帥の歌は、母である高倉三位の子への思いと、子である式子の母への気持ちに配慮したもので、行き届いた、情のこもったものであるということができよう。

### 三

母の返歌はこのようであった。

返し 高倉三位

しめのうちにのどけきはるのふちなみはちとせをまつにかかるとをしれ

ここにも「待つ」と「松」の掛詞が見られるが、それが、帥歌の掛詞の意味を切り返したものであることに注意したい。「君まつがえ」ではなくて、「千歳をまつ」ですよ、といっているのである。少々たしなめている口吻である。齋院と自分への気遣いは受け取った上での、きまじめな反応ともいえよう。

この歌も詞を補って解釈すれば次のようになるであろうか。

賀茂の神にご奉仕する齋院のうちにあってのどかな春を咲いている藤波は、しめの外の私を待つのではなくて、御代の千歳を祈って待つ。この意の松に掛かっているのだと承知しなさいよ。

帥への返歌を通して、齋院となった娘に向かって、母への配慮を喜ぶことを先とするよりも、あなたは齋院のお役目をしっかり自覚してお勤め

しなさいよ、と励ましているのである。私のことなどより、齋院としてしつかりしなさいよ、と甘えず仕事に励むように諭している歌のように読める。母がこのような内容を伝えるとしたら、それは、式子が齋院になってまだそれほど年を経ているところのこととするのが適当と考えられる。

日常のなかで詠まれたた一首の歌からの推測にすぎないが、高倉三位は、控えめではあるが、芯のしつかりした女性ではなかったかと想像する。また、「こころあらん人」としてふさわしい人とされているということからは、季節の情趣をとくに味わうことのできる、感性豊かな人であったかとも想像される。月詣集に大納言季成卿女(二二二・一〇一三・一〇一六)、万代集に民部卿季成女(一七三五)の詠が残る。尊卑分脈によれば、季成には女子が三名いるが、月詣集は寿永現在生存の歌人を中心に入集しているので、治承元年に亡くなっている高倉三位の歌ではなく、これらはその姉妹の歌であろう。万代集歌も同様であろう。高倉三位の歌であれば、作者名として高倉三位と書かれているのが自然であるともいえる。

以上、言葉集所収の高倉三位の歌からは、子を導く母らしい面影をうかがうことができた。

四

ところで、言葉集には、式子に仕えたこの前齋院帥の歌がこのほかに二首入っている。一首は恋下部の題詠である。

寄神

前齋院帥

きみによりこころはそらになるかみのをちともしらぬこひもするかな

(二〇三)

「遠とも知らぬ恋」が唯一例で、独自である。「鳴神(雷)」を比喻として、実は遠いところで鳴っているのだけれども大きな音がするので遠くだとはわからない、そのように、実は自分からは手の届かない遠い人なのだけれど心が上の空になって遠い人とはわからない恋、とでもいうのであるうか。三句「鳴神」に、初句から「君により心は空になる」といにかけて、序詞とし、「遠とも知らぬ」に「鳴神」と「恋」の二重の意

味を持たせている。

もう一首は、雑下部の贈答歌である。

としごろさぶらひけるところに、ひさしくまあらで、あからさまにまゐりたりけるに、「かきたえたるかはりに、びはをひきていでよ」とて、たまはせたりければ

前齋院帥

むつごともいまはたえたるよつのをはなによりかはものがたりせん

(三二二)

御返

むつごとも「」のかはせんよつのをのむかしのこゑをきかばこそあらめ

(三二三)

「御返」の本文が、言葉集承空本の虫食いによる欠脱のため確定できないので、解釈がしにくい。本文は冷泉家時雨亭叢書の影印を参照したうえで、新編国歌大観の読みに従っておく。

まず、前齋院帥と歌を交わしているのは誰だろうか。「前齋院帥」と呼ばれる作者が「としごろさぶらひけるところ」とあることや、「たまはす」「御返」という丁寧な敬語の使い方から、この相手が式子である可能性があることは否定できない。ただ、歌中で用いられている「むつごと」が、普通は恋の歌などで男女の語らいの意味に使われる詞なので、主として仕えた男性と考える方が自然かとも思わせる点はある。しかし、「むつごと」は、恋とは異なる、同性間の間で、単にむつまじく語り合う話の意味で使われることもないわけではない。次の例では、源雅定(中院右大臣)と西行(円位法師)の間に使われて、出家を思い立った雅定と西行が月の明るい夜、親しく交わした物語を指している。

中院右大臣、出家おもひたつよしの事かたり給ひけるに、月いとあかくて、よもすがらあはれにて、あけにければかへりにけり、そののち、その夜のなごりおほかりしよしひおくりたまふとて

よもすがら月をながめてちぎりおきしそのむつごとにやみははれに

返し

すむといひし心の月しあらはればこの世もやみのはれざらめやは

今は、この相手が式子である可能性があるという程度にとどめて、この贈答歌をできるだけ読み解いてみる。

帥歌の詞書は、長年お仕えしていたところに、ひさしく参上しないでしたのが、急に伺ったところ、「ぼったり姿を見なかったひきかえに、琵琶を弾いていきなさい」といって、琵琶をお与えになったので、詠んだ歌だというのである。

「むつごとはいまは絶えたる」は、久しくご無沙汰だったので、今は親しく語り合うことがなくなっているということである。主と女房の親しい間柄を「むつごと」が示しているのだが、ここに「むつごと」という詞を使う必然性は、琵琶を意味する「四つの緒」との関係があるからである。「むつごと」は、これも楽器である「六つの緒の琴」の意を掛けている。和琴は大和琴、東などともいう日本古来の琴で、六絃であることから「六つの緒」とも呼ばれる。「六つ琴」と「睦言」を掛けた用例を挙げておく。

をもなきことを、うりにきたり、みれば、はらにかくかきたり

をもたえてみをさへすつるむつごとはきくべき人やなくなりぬらん  
(能宣集 三一一)

くにもちがめに物いひけるに、ことをいだしたりけるに、ひきてかへかへすとて

かたらへどかひなかりけりむつごとのしらべて返るねにしたがへば  
(仲文集 三七)

また「四つの緒」の「緒」の縁語として、「いまは絶えたる」の「絶え」、「なにに寄り」の「寄り」に掛けられた「繕り」をちりばめている。高倉三位への贈歌と同種の修辭を駆使した歌いぶりであるといえよう。「ものがたり(せん)」は、睦言の文脈としては、親しくいろいろと語り合うといった意味であるが、琵琶のこととしては弾いて奏であるということであろう。

帥の歌を詞を補って解釈すれば、おおよそ次のようになるであろう。弾き合わすべき和琴の緒も今は切れてしまいました。そのようななかで弾く琵琶は、何に合わせて弾き鳴らしたらよいのでしょうか、

途方にくれてしまいます。(親しくお話することも今はすっかり絶えてしまっています。そのようななかで私は、いったい何を頼りにいろいろお話したらいいのでしょうか。)

おそらく、帥は琵琶の上手だったのである。この主に出仕していたころ、そこで行われた管弦の遊びの際には、琵琶を担当していたのかも知れない。和琴と琵琶だけの合奏の例は見つからない。和琴がここで特に持ち出されたのは、「むつごと」と詠み込むためであろう。

## 五

主の返歌は、先にも述べたように、残念ながら、承空本言葉集の虫食いのため、一首全体の本文が確定できない。

むつごとも「」のかはせんよつのをのむかしのこゑをきかばこそ

あらめ (三一一)

新編国歌大観の読みで、第二句三字目は確かに「の」と読むほかないとは思いますが、欠脱部分にあてはまりそうな詞が推定しにくい。三句以下についていえば、「くばこそあらめ」が文末に来る定型がある。

題しらず よみ人しらず

なげきあまりつひに色にぞいでぬべきいはぬを人のしらはこそあらめ  
(拾遺集 恋一 六二五)

例えばこの歌は、私の口に出して「言はぬ」恋心を、あの人が「知る」のならともかく、そうではないから、「嘆きあまり遂に色にぞいでぬべき」ということになるに違いない、という意味になる。

潤三月尽によみ侍りける 権大僧都範玄

はなのほるかさなるかひぞなかりけるちらぬ日かずのそはばこそあらめ  
(千載集 春下 一三二)

この場合は、花が「散らぬ日数」が加わるなら潤三月の甲斐はあるけれども、そうではないから、「花の春重なる甲斐ぞなかりける」ということになる。「くばこそあらめ」は、もしくはであつたらともかく、そうではないのだから……という意味になる表現であり、……の部分の歌の中に表現されているか、内容から推測することができるものである。とすると、この主の歌ではどのような意味になるだろうか。

もし四つの緒の昔のままの声を聞くのであればともかく、そうではないので、六つ琴の方も……、というように意味を取れそうだが、肝心の第二句が確定できない。例えば「いかにかせん」とでもあればそれなりの解釈が出来そうだが、二句三文文字目は「に」とは読めそうにない。「さばこそあらめ」という表現から推測できるのは、贈歌の「なによりかはものがたりせん」の当惑に応じた六つ琴の応酬である。どのような事情があったにしても、長い無沙汰が続いたのだから、普通りの琵琶の音は聞けないのではないか、合奏するにしても六つ琴の方も当惑して、昔のようなわけにはいかないのではないかと率直に切り返し、相手がそれでは昔のままかどうか、弾いてみましょうと琵琶を弾くように、促したのではないかを考える。

この主が式子であったかどうかは不明である。しかし、仮に式子であれば、琵琶を弾かせたというのもあり得ることではないかと思われる。式子は箏の上手であったらしい。齋院長官であった源有房は歌人であり、琴ひき夕霧とも交流があった。歌や楽において、有房が式子に影響を与えた可能性があるとも言われている<sup>⑥</sup>。また、式子齋院のところで、女房たちが歌会などし、箏弾きなどして遊んでいる様子が、季成の甥にあたる藤原公能の次男、実家の家集『実家卿集』にも見える（三四～三六）。

式子齋院には、藤原俊成の女が二人（前齋院女別当、前齋院大納言。うち後者は齋院退下後に出仕か）仕えていて、式子の師となった俊成との人脈を示唆している。勅撰集や私撰集には、式子内親王家中将・前齋院中将（千載集 积教 一二三七・風雅集 雑上 一四六一・玄玉和歌集 五五二）などという女房名も見える。言葉集に入集する前齋院帥も、歌や管弦の達者な齋院女房の一人であったのであろう。

式子齋院の周辺には、つれづれを慰める風流な年中行事や、歌に関する催しもあり、それに伴う人の訪れもあった。齋院時代、式子の歌に対する親しみないし愛着は、このような中で育まれていったのであろう。

## 注

- ① 『女院小伝』殷富門院の項（群書類従 卷六十五）
- ② 伴瀨明美 『明月記』治承四五年記にみえる「前齋宮」について（『明月記研究』四号 一九九九年一月）
- ③ 治承元年三月一二日条。『平記・大府記・永昌記・愚昧記』（陽明叢書記録文書篇 第六輯）。高橋昌明・森田竜雄編 『愚昧記』安元三年（治承元）春夏記の翻刻と注釈（上）（神戸大学大学院文化学研究科『文化学年報』二二二号 二〇〇三年）
- ④ 言葉集本文の引用は、冷泉家時雨亭叢書第七卷『平安中世私撰集』の影印を確認の上、冷泉家本を底本とし、その原文の片仮名書きを平仮名に改めている新編国歌大観の表記に従う。
- ⑤ 言葉集以外の和歌本文の引用は、新編国歌大観に依る。
- ⑥ 兼築信行「もう一人の如覚―『夫木抄』所載歌をめぐって―」（『国文学研究』第一四〇集 平成一五年六月）。『箏相承系図』に式子の名があること、大神基政が夕霧ともう一人の女に書き与えた楽書『竜鳴抄』の奥書から、この伝書を式子が安元の頃に所持していたとわかること、なども指摘されている。